船長日記 全

特別
ル 2
3219

門 3219 號 卷

秋田小學圖書

池田寛親うかゝ
松長日記を見
大海亦なうれ
白波乃もの
先つゝしみかゝく
令も年月もつゝそう〳〵
船人の
うれ世うきをうく
水うき
亦うつゝやうめて
るそ
沈の
こゝろ
ゝまる

文庫

東亞圖書藏書

本居大平

船長日記乃ち書
近ふよいろ〳〵乃船子とも乃物やしきを人乃くちの
よひ〳〵さわ〳〵乃かしこめを見たくも又男ハたくう乃
く幸ふ帰来り有るとの物すくなく甚人〳〵乃又多
事ある事と書附の一冊有るこれを世
ふにろくハ有ハ〳〵有るとをハ附をしくめつしきる
とむ有とて書有るみこのこそ多る年月経なれつ
るせんをそなれ有ちしいきしきつ海乃いとお
とゝ〳〵き波風ふ有ゆくほゆゝ花を給しさいう
ち有〳〵船んとゝひ有〳〵うのこゆくにるう乾免見る時
の印里さ有をくハしく書有るこのくなるをを印うひ
てとゞめるよとし〳〵三河ふにものしてゆくもるほと尾張出

の船人まで吉とよろこびあひ、
巨細乃御浦と云ふ新しき
とられ帆柱をさく切すて
とせわたり何う程いつくとも
よひ来りかうした人のほ乃
と先として大とせを経
年月乃うきめつゝとか
乃ね乍ら行つゝ
ちるせる事ともハ大うちうちのふうに
さこなると十七ヶ月と云ふ
よひうき舟ある程のくるしさのかぎ
ひまさ海ち今きて

ん兄もるそもゝおほうく乃世に我身乃有さまハ仏
る吉海乃事を書あるをよく見てたゞ世ふち我
うち月乃あひも有ありとやうに云ひて心のなく
さもうちかうをまして吹流され漂へし人あとの方さ
海をくりしかも云ふ世ゆめのおいみしき日
と見あるもをそうしこゝ大うちのうち事ち物の数と
もおほくしてあまなんなくさめくさともなうくんとも
くうりふてこひあり事も有あるすちなれハ吉海ひ
ありしかまさ海をかあり出るまゝ文かうせゝ浦
真くさをつゝうを入くくしまてもとゝさし
書舟あるにかくあんたい乃一巻とゝなりぬるちち浦よ
帰里あんん時うゝゆゝふもえせてかるいみとゝ先

乃うきまを見給ふ人多かるを聞く君乃こゝろ恵ふかく
仇にそうらふ行ゑとうたてあるの多くて世ふ渡る
うらしけなさをもうつゝなきものにそ
るなりあまされとおきよいをうしさに筆とるまゝひ
給ることゝ侍らねとあるくおこゝろ
ふくもあこゝろめれハ今一ふひ出ん
うらくしをいふにをふとも乗さふらふ
ふうまことなとのうんやすうんまをもとめてにくゝ
いなゝあることゝ書ゆくあるかん

文政五年霜月

池田寛親

泊てゆふ

六のたいさうもかくうへそうしたる郊ハおく出る
うくさ分そるのこゝろハ主君の供遠くあるへくそひかや
も有ゑし又えくたうへ多くあり名ゝくやあるへ
なゝのそうひたる布も多くうへまき布ハかりなゝ色
ナヤウとといひあるをカムサツカとゝ云そるあゝハかれと年なるたる
花ふ七竹ゝ多あつまとしものゆくもいあゝたうひこれハ主役すゝ
のそひたらゝしくゝさしらふゝ
なゝんと其外ゝ出ふるうゝまほゝさ事をいふ
中小画図をあつまほゝさ事をそたゝ
ふもうくのくゝ木ゝそそたゝ
すゑさことむけよさ物心ゆくさ
他を給ふもとやんさくいふふ
たゝのそせ多ゝ乃うの物
いて出れてものせこゝも多ゝ
ハせんすをうゝてゑゝめゝし
多ゑとの八図をゑゝてゑくに
主君ゝいそく今の世ゝ蘭学者
ゝしやうとうれハそハ方角
の海ふ心多のゑき事ハ
乃図を授くゝそれよゝ合

皇国の初といひうゑも
ゝ事もめうんうんさうゑ
ゝ多れと主君ゝそも給ゑく心ゑるゝのん
ゝ事とすゑ多れをもやてゆうゝ
ゝ物をんもいゑる
ゝ図ハとの
ゝ図をとうつくゝそまをゑ
ゝ事そもゑくうゝれとさゑゝもゝ給
ゝ多ゑ図ゑゝ物ゑとの
ゝ持帰ゑ多ゑ
ゝ人のゝ
ゝ文ともゑゑ人のゝ
ゝ考といひゝ真乃
ゝ方角たひゑゝ
ゝ人ゑゝ
ゝハ先くゝ

船長日記上之巻

藍水池田寛親識

尾張國名古屋納屋町小濱屋庄右衛門永子弐百石積ニ督乗
丸船頭ニ重吉 長右衛門と改生一ノ名ニ
なる 重吉ハ田宮郡笠寺村乃百姓ニ
宗吉ハ門徒宗ニて十五歳の時ゟ船乗ニ成なる 物語三帝揖東後帰其の外水ゟ
かゝりて数合拾四人乗組文化十年酉十月尾州御廻米其外諸荷ひ
物を積入国出帆(モロ)仕候ニ付ゟ出帆ニ而江戸小至ニ尾州の御蔵ニ
外積荷揚蔵納同月下旬江戸出帆ニ而同子浦ゟ取
乗霜月四日小子浦ゟ出帆尾州小舩ニ而ニの時斗ゟ湊を出ル頃
乃風ニて大ニ遠州御前崎ニて二十里乃沖ニ而十里ニ走りけれ
行夜ゟ入次第ニ雨風烈敷なりけるゟ船ハ帆を下さんとすれ水を

なるさわくまゐをの水そのうち名古屋矢場栗吉といふ
ものやまつく海中へ落ちるる晴夜といひ私をせいの事な
れバ助るにかみ〳〵見ゆる筈なれ共しよせんよるくり
思ひて船中六人の落ちる時ハ海中ふかくもぬけそも抜そも
有りのまゝをなげこゝろをこゝろ小夜つゝせそこゝろを目あて
〳〵来りて耳うち見ゆるころ時ハ櫂を止めて夜ぬけせぬ様と
ともにこゝろ時ハ櫂を止めて夜ぬけせぬ様と櫂を止めて
く助る事もなき事ハまれ〳〵これも櫂舟を捨てハ後のいひ
るけふもなき事ハまれ〳〵これも櫂舟を捨てハ後のいひ
も大船ハのまれさるこゝろしてふかくてうらしてハ帆を下し吹流されかよいつく乃浦ともおもひ
遠州横須賀のうらうらへ着けつゝの浦うらにうらまくもせ
せんす〳〵なく船中一同ハ驚をきうひ伊勢大神宮〳〵私をまもり
給へと夜あけハ次第よ浦〳〵乃小船
思ひて天国の船うら方国乃地引ふくらしく筏石と天文とをみて百里を

をあまり初事なるとハいへ共何事も比紙一枚
をもつて大神宮の神勅を伺ひて事をせんとハ合ほと金紙を一寸四方に
神宮をおもひて一万度の行被をせんとて行被へ
されバ船乃船頭なる大神宮の神徳のこゝろ
と言ハ船乃うら神宮のかしこ

甚夜七時ころいらこ浦とハ
まて八五里なれハ皆〳〵大よろこひ伊勢の浦
ふ

晴夜よ浦へ近つきもう時方角もまこれハ先も又浦入の火をとらせのく
と大神宮をおもひて目をふさいてハその浦の方角よ必火二つてゑる
なりあるをとらけハその浦の方角を定めよ
小船なりとも

酉戌の方に火をく見ゆれハ夜ぬけす筏石をふくと方角をけなく
甚よく風波よの立ぬよふ祈りまもるよふ
かくしてハ伊勢の浦へ着ものと運ひ〳〵又漕〳〵吹

もとさるに七寛ゟり吹く大おけの儘ゟ成ゟかくゟれ
ハさうひく沿ぬの赤さるく荒之ありて或ハ大なる岸の如く
或ハ城の如くなる大浪立さる紀忠ゝさるいたん方なし
帆柱一本〳〵ゟある風ゟ
夜乃明る須さんせん人を落〳〵ある作業待の竹ありさて
まりわくする九ゟ十里斗二対のろゟ吹ゟとさんあり要吉ゟ
落ゟあるゟ和なれハ後ゟ九ゟ小梅舟を捨んと常〳〵ゟ
よゟ吉ハ梅舟なくてハいつくの港〳〵元ゟりともせんす〳〵
なく捨るハ〳〵落〳〵うくいるゟゟれと一同に捨んとひ
つのりある程ゟ止るを得ず梅舟を捨ありさて両そゟゟ
ゟれとも風柱を失し変くり初ゟめ里拾ある子浦の
浦乃湊〳〵ゟ落さて力をそんほとに子浦の湊〳〵元ゟ里

斗ゟ参りて沖合まて大浪のゟめに櫂を折ら里たれハ
永ゟ捨ゟなりて沿を行ゟをおもむいつもゟ立腕て梶おを
櫓を切ゟかくゟ

（梶ゟ六尺ゟの樫ゟ柄ゟ〳〵とすくゟ元ゟより〳〵ゟれハ
十五年斗ゟゟりつく外乃うゟハ十年位〳〵樟柄ハいすのゟう又梶ゟう
和帆柱を切事ハ第て船ゟ小斧を用ゟして元ゟ目通りの位ゟり
方ゟり斧ゟゟ切に四ゟる方ゟも切里ハたゟり〳〵ゟをさんとゟふく
凡下の方ハ少〳〵ゟつくゟの方を切凡上乃方ハ少〳〵上つくゟを切ゟゟ
たとゟとんとする方の梶ゟ
梶乃上にゟり〳〵とうひ元ゟ
ゟて〳〵今おたとゟとんとゟ
ハンドうハ綱を切ゟ逆りれハ
梶すゟ）

大風大浪ふゟ海里て呈梶たゟ〳〵一つ切てハおゟ落ひ切〳〵ゟれハ
おたゟれゟり立ゟの船夜乃時ゟうふ切ゟ〳〵ゟめお付ゟう
にかうして切なゟ〳〵たりめくするゟふもたゞ〳〵大浪ゟお
迎ゆくなゟをく〳〵

大船の行るを見〳〵ふハ船乃底ゟ水筋物とゝ〳〵ニ
ゟ揚りて船乃小口ゟ
ゟ〳〵に仕ゟ〳〵ゟ

動〳〵今ハ櫂もなく帆柱もなく梶毋もなくあれハ只浪風ゟ任せ
ていり〳〵ゟゟとよろ〳〵ゟ遣ゟ任ゟ斗ゟて〳〵ゟ
事いそん方なし浪ハ物そけしく打ゟ大浪ゟ打込時ゟ皆
〳〵大声を打あ〳〵念仏を唱ゟ今ゟも水船ゟなり〳〵ゟ
歟心地ゟなゟゟゟり伊ゟ
何を云ゟも大きけなれハ毋を出さんゟ〳〵ゟなし〳〵汐ゟ沖の方
〳〵ゟ廻ゟて船ゟ次第ゟ沖乃方へゟ流ゟり陸〳〵車座ゟ
座〳〵念仏を唱ゟるゟり外ハせんすべゟなし〳〵

めをゟり私の上ゟゟ皆ゟゟゟゟゟ
りゆ〳〵ゟゟゟゟゟ

活てゆく事もありかたく、せんすべなく、汁鍋もうち〳〵南洋
流を出ぬ七日も経大風やまされば活を待迎なとする事も
経日しき毎〳〵八日敬成寺の方に行あうち〳〵日本の山そも
行んことそ歎るも小見えしを若狭なそとそれより外四方に山の
そも〳〵以ほかくうち〳〵なりて活より外の事なし
船中の焼ハ飯番炊なとのやうに悔そくるくと思ひいやに
なるもなるもあるう山を見ひ〳〵うち出
池ハ二十程船中二番〳〵焼を番やうにとりあき
船中ニ有 孫右乃計を主日死を海九行〳〵乃方角〳〵哀日流り
といふを記す

船中の焼ハ飯番炊なとのやうに悔そくるくと思ひいやに
まるもなそも池のうちほとさやうなるうちのあり

かくて皆〳〵いふやうう兼日祈けても書てもかるうき苦し
こふ毎〳〵も祈ふそ大悪乃何念となんうち一日も前〳〵
まて死なんとうひ念すをそ右ふ〳〵めていや〳〵死ぬるハ
いつそも死なるやう〳〵まく〳〵今まて毎〳〵毎九ハ今去
ばいもんほうして風の止むを待毎〳〵いつ〳〵風乃毎ふと
いの事やハ行るやうひ事ハいつまても事ゆもとそ又毎佛のそ
まて日を送りかるも小大風をまうけ十日ハ念羅大荒況の時
級り〳〵そて皆〳〵姑離を出りて一心よ念羅を祈念すにこ
の時斗に何ともさうもなく二羽鳥等ハ船のうち
を立舞皆〳〵笑て念屋庭の出現〳〵の事んとそ喜る
をふしをそむかる未の時まて船の内ありとさ〳〵泣喜る八活
風もおしい止れ十一日小至り九日めまて
初て風名ふそ〳〵なるそ〳〵いつまてもいふくよ絵ひひそ

くよちこさくも梓をこてらへ帆柱なと梅る如き音そよ
よかくとるくと南乃沖へ流出歩そ八丈島へ
心地なきと（八丈島は江戸より七拾四里半）とつへと実そ七拾四里半ありまれとも何方とも論そくく
さりとれ八又紙窓を梅土一支を吉日八丈島へ何方よ向うと
いふ事を告こせの人と念して寝入所あるを寝そくれ
八丈島乃方とのみ告なるに夢の風ハ未申乃方より吹来
るハ如何もふしきらへ有帆を出そくマキテトハアクルトニフナリ
はそくに粉行方ゆも為もそくれ又八丈すて乃及のりを
何んとそ十里より百里まての寝を入そくに四十里と出
有れハ陸へ大なる牧ひあるこくひ梅舟なくとも論そくよくハ
免行そくんかして三日夜明そくに度せとも名をくはあるに為山そくれ又寝ら

取よ一つも附す舟を往をくれそくと又百里より
百十里北里と次第よ二日まて走くれ同の百北里と出有りそ
又八十里斗波の引度それあるよて此それ八丈より南西へ百二十
里西有そ里沖中より帆の如き物ハ見ゆる和のこくれ松中一同乃を失
大風吹起りて大浪を来ひかいてさるくを吉又寝を梅くれ風凡そ帆をまて先
くんを又さ私を梯よ流しくて西乃よ流しくて西を
西しと出有れハ帆をとりて流くて十四日も又大風あれ
ハくて一夜よさとあくて西を外なくて十五日も
大風あるにくそ夜八日くて洛よ大神宮及ひ氏の神八幡
吉乃御像日なれハ出て昇くまりをやりて祈る八仏よ又
何とも吉まてる吉をくる二句そくそれハよいや出神宮乃

出現しのみなんと共そうよ向のく深く祈る以先も又
己の供ふうまの法をそして私乃ふ毎のをさしび之尊き活
風志つまる事宗教乃自る乃御のことし（此後十日ほどそ向のく深く祈る以先も又己の供ふうまの法をそして私乃ふ毎のをさしび之尊き活風志つまる事宗教乃自る乃御のことし）
皆く信心仕にめんしてて神の活をそうふ十六日より女
しハ風ゑくさあり主吾又寒を伺よる八夫多うう五百里
南へ行て主吾語くにに向いてよる八夫をそく離をあれハ
山よそ容易よ古うく帰る事そなりめて今ハ兄悟せし
ハいしめるなんそて来年を乃食物をそうにのぼり私
なれハもつて来ハ五斗入六俵なくていなし其向を立升用
そよかうひを油まをそ十二人よ刻合液を水も一人多三升
五合てなくていなし五ハ七百俵ふりあれハ主をつりく
粉よくぐ乞来をおしてて文く食物ふせんや主先あり

十七日ふそ水もそしくなりあれハ主吾工夫しそうん引
をこうく毎り先の大谷く注水を汲迎くそ主大やうある
仮宅つ乃屋く穴をお普をさしび迎谷のよよ後ひ甚と二
綿をつりそけくぐんの爰うりあるゆ事綿乃屋く向主
くちくり為る事にちみて水を有うに一日に七八升を
かりづハともるを十二人よ刻合くのむかくて階くハ力を
先ひ古々乃事をそひ親兄弟妻子乃るのくみよひ
くしてぶうり升のうぎなきをまた吾くても心乃向う用
しまる屋かくてハいつまも病を爰し角うへき命も
物まうこ死やくふもなりあんまをかなしく心よる死々
しきを次しもそをに階くに向ひくいやくハ明吾活
風ふそくむくを古々をそひ親妻子の事のくお

仏等して治平でハ病を生じ又重しだいつく社の
山に毎ごとひにくくもも頻ひなげでして男舞つるもなハ
助る命ハ命も助りかくかくん心を祈るんよ持〳〵親妻
子をも歎くとそふ重しかれらと書いんとてこうめれ
なりひをしてかほともまで苦しきうき邪雑をすふ
ハ省なれ毎ごとひ古ごとも邪雑をすやても重ももす
並て前ふ縄を治るたにハ初〳〵ハ口すると乃出ハ初叶ぞ人
の門るとそその事なしすやなげいひとせとも皆
さハ思ハ並作〳〵ハとのくをまで苦もとてハまし
なふはやそうしてさつかしこ舞てもめ〳〵も書れさまてら
ま年八十八歳もそくしく八丈ハ私の出初ひり治くる乃ふ
平作〳〵すやと八丈私よ舞ても書ハ書れハ書時そめ〳〵

なびをしてとふふなるをまづそれまでハよる乳麦をえた
里とそはそれをたのしひりき為の唱妻を学そハ先つ
つなごり神の傳にお文〳〵ハ書階〳〵の事をいのり作ず
等してハ書る毎そんとを春ちかみ〳〵ひ南風の吹るなれハ
氣を丈夫ふ持〳〵頻つびまれとを古ふ〳〵吹のみさまそ朔
とそそしてそれを力に歩しもとひこませ
ど作は思ひ初きめかるしとみあ〳〵もことりく
かくそ日を海るそしよふに新もそ毎れハ私市にいりとる
乃臭をかくそしよふにおくる乳新よすふに浅そ
道臭もそ〳〵私ハふかしをおくぐ乳新にすちを妻男
をいむ心地して心細さいそんめあ〳〵ゆくりよ役を
定光水を汲新をふしてとをいりらんをとをしゅる

代り合〳〵其ま吉ゝ日死を待つ〳〵それ〳〵の差
別なく〳〵陸〳〵乃氣をうしなひ二日三日の内に
私共一同は皆大酒にせめられ〳〵なひことに而佛とおく
隔さりて〳〵つもり〳〵今ハ氣力も盡〳〵そこよりひ合
せ魚乃如食となりんよりも何ほ乃事〳〵おとろしくもあれ
の私共ともおもはず〳〵に纔のそばうく命を育くミん
と其事をのミ心を苦ハやミめなくなるへとも活てやミみな
ハ亡〳〵海へも死入〳〵ん勢ひなれハいふもおろかと一番ひハ
同志一て相やり〳〵のひなきやうにやかくすら役を必白
き名ま吉名を流ん風ハ末乃事とそんてもかまハ
姥離をやりてハ又死ぬといふも面ある心よ陸〳〵
なるそとなれ共も今ハそひ定めて死んとすれ

ハ又かう名る所を出〳〵ハ少時り〳〵すること十二夜〳〵雨月一
そんハけさ海そ〳〵ひよおろ〳〵哥乃夜雨つゝたる
まに〳〵五度一夜も雨つゝ〳〵ハ少〳〵風乃こゝ吹
日乃れハ雨よかつて〳〵風乃ミ吹ぬうちハ名く同雨月ふもなう名れ陸〳〵
風乃起ハ名佛を出すことをひ合てハ口海そ〳〵又活
を見るとゝ〳〵ものゝ〳〵なり〳〵二人三人て船底〳〵入〳〵
はお肝やうになりり命りされとも船こにハ力をも有
〳〵信心のミハ名〳〵ひかくて言つ〳〵乃ふに雨月の末
つゝ〳〵より里氣つきなり雨里船毎〳〵なる板乃そよ
もなれハそなふハ其ほ下〳〵雨り毎るなふん雨もなく水
こなる〳〵其こ次雨に里氣活〳〵雨降つ〳〵今乃つゝ
やう〳〵なり〳〵けとそせん〳〵時も古乃そ小迷ひをも

も後の世も功徳ともなさんと云ふを先々しめ〳〵よ別淂〳〵至而る不の第を取上け絶まて大なる珠数の形を拵へ百万遍を初め朝夕百万遍んをくりたく〳〵ん者ハ第水をいつこ迄でといふ数をくり先たる者ハ氣力も衰〳〵百万遍をくる事もとのうくれと命わるうちハ第のたく〳〵多くなるゆへ〳〵ともて百万遍をくる能々乃ち多佛路れハ二人若よ第をとりたらも

さる元浜風ちつまれハ又影見ふそなりに吹

思ふ事〳〵今者その姫法師ら〳〵ゆり来り見る度ごと
をまさるも水雲〳〵水雲をまさる事ふた吾の時乃事よりそはれ
抱古てまでも生たれる死あるうもまさる歟きの中此度
なれハ誰ゆりて年始の経歳ふ事あるとみも吾前〳〵など心
中るそのも階〳〵同し心なる〳〵者てハ同倒乃姫法乃
吾似をそて中〳〵ゆり事吾よ同し経歳をいハんとも同
出ん後をかくまさ〳〵抱階〳〵結よ同ひてう乃水茶を始めるる
に事変乃人を知てねをそとと心とそまつと泣出さバ今
までも〳〵忍びそる階〳〵のまさ今いかくる〳〵よ変事あ
ん〳〵なくと吾吾ハつぎと初をかけいつまもきのみ乃約束
をと志たるう私ゆりてその比若〳〵そまうかけ〳〵
ずや抱ゆり〳〵上〳〵ざ〳〵ハウタフトヤク

トそうナ忘テ云頃ヨリ
ねをのぼす雨雑煮乃出〳〵を雨〳〵とひはまう止るを海手私
ふまて茶をくふるを吾〳〵乃そひはまハ一人も勇を
御を見〳〵階〳〵心乃中にそあ〳〵乃そひはまハ一人も勇を
合そ〳〵多ぐる者らなく二ゆりでなぐるなるとまう者ハ
なぐ多るもゆり逃そそのハまぐ二ゆりもなき雨ゆらば又な
ん出をハ又階〳〵も於くそ吾を見〳〵吾吾も今ハ多くまて者へ
如〳〵記者うなきく多ありめ〳〵てつ〳〵そのよ申うな海
まてそ吾もなきく死ぬ雨〳〵吾をなくさめんと云事も
して中〳〵ゆり茶中階〳〵に匂ひ〳〵ハ浦賀の御判物や
尾州の御紋ぞ〳〵持てあらふそのなつ〳〵ハ何ぞ乃浦へ着た
ま〳〵もゆる事そなれるなれハ今陸そ〳〵忘ゆり

今今二三十年もかゝる事〳〵絶も七八把かり常もそいつ
も無まゝかくし名ひく物事そまゝ姫も事なるそ今
ハ母もして此今銭を皆〳〵ふかく〳〵心の油うせて御賀文
といふ事〳〵といひ液〳〵今銭を此〳〵かくれハ一日も
ろく〳〵初て銭を恨そ〳〵事〳〵さてと今銭をおて再命の
らも水一杯をうひやそ〳〵のみる事多ふなく〳〵ぬるてハ作ます
や物貰ふかもて何ふらせんそれもやをそのまゝそ
作ことて皆〳〵恨〳〵うやて誰一人そうもとするとのも
ふし今ハ主をもせんすべく皆〳〵も人の中ふ〳〵の
憂をいふ〳〵なれ初ふし〳〵て日を送まくるもくて二月
乃末ふりて皆〳〵よりひ今を此事に十四人余の内一人
もやく死〳〵ふり今生満る面〳〵も誰死ぬ生るふ〳〵

ふ初ふ〳〵誰ふも世よいく治りて古てる帰るとの作〳〵ふ
此那市ふて死〳〵ふる者ふ主に人ふ門ふを悪ことを
云ふるハ主をふ佛を唱ふり初てなりとも奉加をして行ア
乃田向院ふ行るとく大なる石碑を建之〳〵て長く其
提をそふ〳〵んとそもちろひそるかくて彼も同〳〵さ母て
日を送ふに二月ばかり人〳〵次第に病人ふふり来り諸〳〵
ふくなりて始ふそ也なふ色ふ香も面〳〵ふまれハまそな
ど〳〵一皮下にふそ血ふ色ふ見〳〵ふ利刀をまて其ふ
なもりふふそ血をもちばり出〳〵ん汁を取ふる法の陸ノ
ふり乃湯ふ浴〳〵すれハ其ふもりふふる赤〳〵陸湯ふこと
ふり初ふふふ〳〵ふねまと後ふそえくもなくふふ〳〵て
其いふ〳〵ふ法ふのごと〳〵まとともふく世ふれ其思

みて死ぬ二月十二日に又田ノ村の水を呑ふ病死
に候ゑ浦九福松死ぬ十三日に半田村宿ゑ死ぬ日も
乃山を見ものく出家よりなりける添之師死ぬ十四日も
村水を呑ふ死ぬ十九日に仕ゑ村浦の三之介死十廿日に田
ノ浦田の村乃主ゑ病死ぬ日の浦の安兵衛死ぬ六月八
日より六月廿九日とて十人死ノ病水を仕ゑ乃者呑病
の半兵衛武人ばかり船底ようなり呑るめくり引ぐく死
昇ノ今ち三人よりなり病れいく心細く今の家も死
ぬノノと泊船のノゑ病する主呑ち病る二人のよの思
ゑ送り果てハ死なれめてゑ子ひきノめて物も看病
ゑノゑされても今を十武人の女抱を二人よて去りしに
今ハ三人よなりなれハ水も一日五ノ薬も物ノ梅なと

しゑ大よらくになりたりて八月よなりれハ新日二日
新つゑ大雨降る

去年ゑ月四日乃疾遠になぐさて病る後一度も雨なりしに
十ヶ月めよて初て雨よ遊ひ降ル共呑もなく雲もなく日く
晴天のノなりしかハ人ゑ呑ふ大洋の中なれハ呑ふ乃雨ゑ
手なれハ呑呑も及ハ新なりなぐし

主呑大よの旅ひ船今を初め何よもれ乃よふ水をうく
き物乃ふ新ゑをなりノぐさて水を呑ノ人形れ光ゑ
ゑと安堵そしゑ降る雨三日の新例乃ノしよりを夜よ止
雨れハ海乃中かハノくとなると実よいまぐ疫病呑ふれく
しく大ノく魚なるんと乃ノくもけをなげ入降るに（ハゲとふ牛乃角ゑそ鯛の形よ似り尾乃方を河豚乃皮ノ事ゑ呼る鯨をつる物ゑ）忽ちこられ降りよノ魚乃ふ
ゑりと乃ノく再びぞんをなげ入降るに今夜ゑ泊ゑる

十人のものどもをまくらに神仏を恨みまた悪きをあるいは死骸を岸へ葬りてやんごとなきいひ方ひさしく汚れをあらはすの船中に有ものへ一つくの汚れをも洗ひすてんと思ふ事しきりなれバ今ハ海の中へ捨べしといふをきゝ入ずハ海の中へ捨べしといふをきゝ入ずハ海の中へ捨べしといふをきゝ入ず

すゝ程よき夜も明ゆくまゝ文化十二年亥正月元日やうやうくれ
ハ又元旦ゆゑ事うくしき物乍今こゝさゝめく乃出窟を個〻の終の命
ぞと思ひ乃裳はそれ〴〵もとめ窟をとりてのといよ〳〵死を極め
んとそれ〴〵仕度するハめく〳〵そひ定めても野心乃夜あかち
うそもまぐ運命はきびしく助る筈もあんなうの連
ひく於てこれを人乃命ぞと〳〵かくて出窟よりうまくたに
弟うものそこら一粒もなしきるさ乃うすを外より入紙を
切〳〵窟を出すもそこ夜し窟こゝ遠ひ我命の境ひ
うれハ筆もそこびく目もうるべやうこゝろこゝろ
種乃心乃中何よたぐもんなし命乃
ハこゝを按けのく〳〵こゝと出てこゝハ水ぎよ城を行〳〵五十余
〳〵都ひ例乃作法ふ初へべやうこゝ夜の中一枚ちつ

きかなとこゝ紙うもるの乃かゝ絵〳〵ちうひて
夜もやこゝもひ風よくれ〳〵目とろべむのハこゝ絵く斗
くりてちぐ〳〵ハなれ形あるが行こんなる我連ひと
いきらめたる紙んをそひおらー毎二毎こふ押ゝえ
をハこゝにゝ〳〵けなやこゝと出あり其の時乃姉こゝ又たと
ふぐこゝ物のなしをうそて書くう出ちうをやり又補〳〵
大新を紀〳〵毎こひ命乃下乃りてもとし一年ハ不全なりくべ
行月ひゝちう助ちふんこゝ毎と紙窟正月ちこゝ
個の〳〵こゝ正月二月二乃ちこゝ
すをこゝ〳〵日をちこしのの〳〵とて正月二月二十日の窟を夜よ
正月廿七日と同廿八日と二乃泊あり又ハやうこゝの出
んぐ〳〵先乃旅ひ御人何方に山をこゝ泊行んやゝ方

角乃家を夜半過ぎ丑寅の方と出立ちて船の表へ
出でをうに甚風烈て猛石を乗て日〳〵丑寅の方を
のぞなるめ〳〵くらし風もなくらし〳〵されど西風なるに早
速なれど二月なるに甚乱六月中のごく〳〵
凄ぢ〳〵雨降り十日と十五日に例乃通り舞ふと物
同じ〳〵雨く甚度ごとにこと
て廿六日の夕つく〳〵丑寅の方に行てうに遥
うに見れと山のごときたるよはうちく見ても山う
とそくはそうなりにくる日も形もうすり又消うぜし
事夜〳〵なまは今うに見る山乃形を見ゆけ〳〵雲りて板
へ出つ雨もふり初め七日の朝日乃光よりあれは疑しき乃
山〳〵それは大よ収ひ出船うに出〳〵事なれ

ばいと赤て西〳〵二人乃着へもいひ出さん
う申〳〵の早速をぬうしてそ
ことをそ〳〵る船うに晩方うに出
あ〳〵なりぬまて心をなや海〳〵若風に出八日の晩
寅乃時そうに又西風よりうり
雨ふり夜明〳〵それは二十所ごうり雨ふりて
行〳〵うしやよく〳〵それは乃苦行ひうに家もの
うんなど乃つまで吹く狂迫く見渡さるにちやくら
乃ともも物毎なる事とばせんうなく魔をなぐるに人も
いてうび多くの八百をを乃もきうり雨ふり
次事ふまく〳〵と流をは追く日〳〵にのおにをさうを
二月七日乃午の時そうそう山のうちもく

納めをる〻に後離一封書船を乃妻の髪比を女し双六の盤二つ（サイノメノ書キカタリ）
さ二ふを納め主を招むとハりつく雑船乃る時ゟ心ゆ船むさる〻雑船一
ある船をそろに心船めをさきらのくとて雑船すべき心有る行ぐに化し
て近そるもそるく或時尾列自主先を若船とり心船伊勢に主り乃
渓ゟり帰帆の時湊そ乃ゟ出ある仲中して船庵ゟり女さ〻出ある〻
河乃湊ゟかく〻ゟ振るゟそそ〻ゟ船庵ゟ帰る妻女船中へ帯て帰る〻
そ〻もすれハ出帆乃時かハそそ〻ゟ船庵ゟ帰る妻女船中へ帯て帰る〻
もなき〻ゟ〻ゟ〻ゟ

のこ〳〵にりて中ますをぎやうんの笑ふ陸酒水なる中
ごうを庖丁もなかなか七(サビ)しもあまく〳〵ごうその毫力めくり〳〵床
九中〳〵力あめ〳〵並〳〵中そうまそ元そうんご〳〵りそはたんご三切
そうそ元料理そもなし〳〵れバのんどをな〳〵ひそぐらくを
う〳〵取出まうまそ台をそうのひ〳〵魔ふかるべゲッエべ
ッユデメッべチッまそ台めく〳〵井神のやうの物よりろもし
乃形〳〵て豆天中〳〵にら〳〵そうあと入〳〵持出てうべゲ
ッの侍ふ四中〳〵のも二十枚ぐうそ〳〵ひそぐうをべゲう
夜〳〵くうんの豆の枝あるあとかー〳〵て出〳〵ふにー
食ひ中〳〵もれきう元見合て出れハ陪〳〵甚ふを元ふて
食〳〵そうふ〳〵ふだんことを夜〳〵食〳〵なごすことを元て手台
も元こそ豆を食ふハ夜て行〳〵べれ元いごしハろひな

う〳〵一切夜〳〵食ふ陪〳〵なご〳〵粉ふ食すうを
まそ台そ元て力る事なれハ中〳〵食ふ陪〳〵かくて笑ハ引元又
汁の枝あるあを持出ふうんようごと何うまそこと入〳〵水着ふ
中〳〵ふるあ〳〵陪〳〵注を入〳〵食ふ〳〵ふれハこうもなし初めの固ふまう〳〵事ふ陪りかる
入〳〵忽ちたべ終る陪〳〵ふ〳〵ふれごろひ切て又二切夜う
をこうて斗又そんも心〳〵ふれごろひ切て又二切夜う
乃汁一ぺいふ二切を忽ちたべ終〳〵中まこハ又甚笑そ引夜今
夜そいとも〳〵ける元ふる第乃皮を引出の様なる〳〵ハ一ぬまば
うを持出そうあそ久〳〵中そ第乃皮を汲ふ山ふ食ふるよ
とふる〳〵皮ひををハへゲッ夜て元日の皮様そうひて内人
笑ふりまそうけて出ひをを心乃井〳〵そ力を居〳〵なる元も
元そたべ終をを又事ふ陪ふをを一切夜〳〵たべたれハ潮後も八

ゑのふみちをそは竹笹もり又持出る物をへゲツ
庖丁にて切〳〵二切〳〵ぬきて彼の餘の油身〳〵切る
不をよく〳〵ふれはさんぜんのみそ乃ふと葛焼乃やう〳〵にし
多く〳〵数不を見〳〵ん一口もたべられひて一切合て又其
笹を引被今夜もへゲツが切〳〵出ぬ不をそれハ例乃かほこ
くうれハ是をたべぬ是をくうてそして多〳〵称ふて笹物も
沢山なく〳〵持て入多り〳〵て其後う多の肉を思ふ存なと
高く集めと倉〳〵形ある不く〳〵て餘とそひ〳〵もぶく〳〵成
多れハ乃乃多ぼさも何〳〵そうけんきう而ほう〳〵ぬくの
員を脇くたりて〳〵是ハ足くとも仕方を〳〵而うこと
見を〳〵是を何そ〳〵ぞと同さ而そして〳〵是をそれハ引く
指を二本わりて〳〵是多れどころ〳〵取こと而多れハを

うく〳〵と約牛の角を二本持参りて見をとり和ハうそて
も当んふそハ乃くとも牡〳〵ぶつ〳〵ぬきて〳〵是を牛〳〵
切て桶乃ふそを入てふんすると能〳〵それハ牛をとる
よ切方の〳〵油漬み〳〵多るまでぬ方るとハ油〳〵
ふ多りてそ二人のとそいろ〳〵なるふんとろひ約て尊れハふ
八十の日々にうさ而〳〵の物をいくと食〳〵多もつきて餘
乃油身を味ひふるときなとといふを歩〳〵甚くしらこを
豚なもとふ多ぶこハ牛〳〵今ハ神〳〵ハをが油をれぶるやい
ひおせられハ二人ふるきてあさ油〳〵乃るやふとてを乃
枝成物とたんごとのこをいく〳〵と並へと新ひ〳〵話つ重し
ということをつ多とよりてそハよろ〳〵かへびかれり〳〵な
ゑバ何よまれ話るそのとこく〳〵食ひ而をるとと

ざ〳〵ひ笑せる

きのふのうすか〳〵しき事を今そのみに笑を
くひなをしくるものゝそれもそれ〳〵其の形のくるを食して飢るをよ
倦よりくまでたべさせ〳〵ハいか〳〵うなんとやり〳〵る合をまして
あるく〳〵今ハあくびでるそもそもたべるのもくるしみ
ハこのしくるうくれうされハ
含しうまひものうげにかくれて
しまうまのいろ〳〵池をそこ〳〵ぬるをりとかなん

扨かの亀の上く日中乃活計いとくるしくそこるその〳〵
くべゲリ初三人そこ〳〵ぬるをさ〳〵ぬるをさ〳〵ぬるをさ

松長日記中之巻

かくて日〻食ども多く何〻つゝめるもなし牡もかつて日〻食ども多く何〻つゝめるもなし牡も
男宮〻〻と四日だゝるに大きなる鯛一つを
もりもの魚乃うけ〻釣く帆をとし皮舟十四艘を入〻
し猟師どもおよそ二人づゝ乗つま其舟〻後艫を入〻
詰〻もり魚をとりはるの東乃方又小の方
よりとをくそこもとうの皮舟をあつまりて元松ハ
帆をまきて〻出りて
皮舟を水中にうかべ〻皮をもて艫をあつまり長十丸を
よりもりもり魚しよう完乃りて其宮〻人のうしだを優まて入て
組〻〻〻〻水のうへ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
人のりもりあり大きなる物のさまし〻〻〻〻〻〻〻〻
猟師どもを〻〻〻〻

おそうり又子ども乞方くに百だうやをさして地方〳〵つき渡
とおぼしきあく後をもて先うに長脊〳〵ハそうこういう
姉〳〵そうりかくてへゲツ初七人おつれ〳〵陸くに
うく二人のうくも先うに先うに後〳〵ハ女七八名
連ひをおこひ〳〵とひ〳〵陸〳〵上もて十四の人ハ
とり廿せ連もの出さうに出ハ人〳〵と回し方役
をうもり先うに長脊小遣回り紅毛人なるべしとそふ
まるうかし〳〵大そうく前ハ長脊やしきく等二ハ
そ先うく後うに角くさて呉国人ものよ接拶して
同〳〵馬よ奈まき吉かもの出ひれと奇てる事なき
もうらひをり〳〵なべといへども急せび止うをと海ぎのり

ハ奇りなれとる一定もすゝ〳〵ハぎれハ種そかうとうく
とつよ仕うをうして又せりれそをとゝ〳〵是班のもと
又仕うくをすうる又先うくおうくお家を毎のこ尾をふ
うく〳〵約音百を約よ畑方〳〵小麦穂小出毎りさそも
長脊ハ早〳〵種よ歩うをと之ひて一里そうり約〳〵
向ひをうをハ向後の長屋の松なうとの男るハ守
及ひ〳〵紀毛毛ハ向後のうべし大ほ先きとそ〳〵先ゞ男
女二十人計出連よ先きの形なつ人も葉屋被乃被うを
毎りおうを大うくうるり〳〵きをさ乃被うて袖ハ男の
被うハ女〳〵大きふして腰うもも倍のおうものやに
ぎ〳〵行うくありて裾乃方ゑうりて毛形そきれそ
つくを耳よ物をそをくうくをめくせ女〳〵のうをうをつ毛

ぐ方角へそうろうて長崎まで行くべき生なぐ〳〵畜生
乃く落ちゆくうと又おそ後しく〳〵なんて滅亡る船よ
てもかの数〳〵ある手に沿をにうて〳〵私乃手く積入うるとん
て二人もなぐ〳〵うかくそ又うにのりてきのの不く約て
これを門乃前よ牛羊豚毛などきもの数七百斗数
して並べて有うるくようにして後
白乃人料理よかうる中〳〵
船くかくそうそ沈む出うり相うそうる地球図の有うとん
くしかはいづくになるぞと同なあハ山石うそヤロニヤ乃属
国北アメリカ南アメリカの界まてノーハイスパンヤとうよ
不うて赤々白夜十夜のうみて日出と入り合せのまく
とぞ知うり助けまとあるうそ船も行毛まそうそもうそも

魯西亜(ロシヤ)乃属出歐邏巴(ヨウロツパ)乃国諸入利亜(イキリス)乃故ロンドンとよ
不乃船うそ西くへ交易よ約船うそイギリスの私いお
ろやかの船子部石被高人私六百被者とぞ思〳〵そイキ
リスの私小アメリカへ行よう山不の切まなうそは入事叶
ぐされバ心ちくへ第う事くしてそ新水芸外など
おなごも夜入うくへ行るまくとぞ

ノワハとハ新〳〵とよ事うそはおハ伊西把泥亜(イスパニヤ)出うり後よ合せるお
方動イスパンヤとうよくとぞ船て候亜米利加の人名をヤテガ
とうふ日本文化癸亥年小冬十五発書そ字尾く一枚よ二字ハ人名ヨ
一人ヤ十四人一人もうかすうまも使くとぞ

和二人の病人も船中うそハ安生約而ありうとてヤテガの
家く引取まうくよ抱せ一中私ら全合うそ私出る事く
四〳〵に陸くおぐアヤテガの宅へ約跡をよなりたる事

乃坊もせめうしされとほ人よ向ひ〳〵チマヨ〳〵と云ふいた
く疲之事ゆゑなれ共何の疲うもあらじ面白不可思議の六里
でうを川とうそよほど大きなる里行りて役人毎〳〵乃
人も何とぞし渡く船乃入ある時役人毎〳〵乃人と人共外人
数二三拾人も舟つを大キなる川毎よ舟つりて来りあり文
易なとする物よそうなる〳〵もの船風よ進ひあれ時
損〳〵ある梅其外他事せん〳〵為よ船を中〳〵免あるなり
十四日を経〳〵いつ〳〵く毎日乃如く毎日乃朝とて三人日本乃
二三十人も来ある中に一人日本乃役人向ひ要弁
ある松宗とう風俗を異国のさまなれと眼の校子其外日
本の人よ違ゆなしと見依あれハ宮部雅乃次第とこまや
うに咄〳〵ゆせ〳〵何事日本へ帰りもあし依依ある斗ひ〳〵依

〳〵ハ成うあ〳〵とな〳〵ハそのまにつきなりひを
させ〳〵なくべきなんと祈んもろうる松〳〵と雨ゆうる何とい
る松宗とう風俗を異国のさまなれと眼の校子其外日
本の人よ違ゆなしと見依あれハ宮部雅乃次第とこまや
うに咄〳〵ゆせ〳〵何事日本へ帰りもあし依依ある斗ひ〳〵依
〳〵ハ成うあ〳〵とな〳〵ハそのまにつきなりひを
させ〳〵なくべきなんと祈んもろうる松〳〵と雨ゆうる何とい
ふ松宗とう風俗を異国のさまなれと眼の校子其外日
本の人よ違ゆなしと見依あれハ宮部雅乃次第とこまや
うに咄〳〵ゆせ〳〵何事日本へ帰りもあし依依ある斗ひ〳〵依
〳〵ハ成うあ〳〵とな〳〵ハそのまにつきなりひを
させ〳〵なくべきなんと祈んもろうる松〳〵と雨ゆうる何とい
ふ松宗とう風俗を異国のさまなれと眼の校子其外日
本の人よ違ゆなしと見依あれハ宮部雅乃次第とこまや
うに咄〳〵ゆせ〳〵何事日本へ帰りもあし依依ある斗ひ〳〵依
〳〵ハ成うあ〳〵とな〳〵ハそのまにつきなりひを
させ〳〵なくべきなんと祈んもろうる松〳〵と雨ゆうる何とい
ふ松宗とう風俗を異国のさまなれと眼の校子其外日
本の人よ違ゆなしと見依あれハ宮部雅乃次第とこまや
うに咄〳〵ゆせ〳〵何事日本へ帰りもあし依依ある斗ひ〳〵依

乃祝に「アミシヴカ」と云ふ不乃湊の入口なる
る石ある所の名を出し一綱乃松なる処など夜泊て九ツ
それを過又ある一の石火矢を一ツ放ち毎朝初〳〵石火矢の
音を聞〳〵いと多く砲船を陸より沖〳〵檣舟
八艘より十四人乗て毎〳〵湊の船を迎へ入る湊よ
八丈船八艘かゝるを番西亜（ナニヤ）の船三艘
懸〳〵三艘を一組として湊より七里沖に船を泊
り船なるとして番るも同じ様に船人家二三拾軒
もあるを一のものも多し湊乃上に山嘴と云
一ツ天守なごの如き家あり毎朝なるものも見へざるも
十四五ヤ此頃亜米利加（アメリカ）と云ふ
（アミシヴカは北アメリカの事にして小笠原七十度の所にある）

天乃時の中〳〵そ出ること
晴〳〵しき日海そんこ〳〵
八一ハイスハシヤ〳〵七十日
たゞ〳〵しき所ある不そ
して数十里西〳〵そ
溪へ入〳〵夜を
ようやかそ番る八艘
とゝる傍の上そも建
乃船ごとに次第に九ツ
も又九ツ放つ
入船〳〵る夜
て湊のく日本乃俗四月を
イキリスふをき
右等其外乃船

又石火矢一ツ
ようやかそ
溪より方行
船皆〳〵酒
メリケンは歐羅巴（ヨウロウハ）乃うちにて
元〳〵メリケンの船〳〵一同

うつして酒盛をそゝもむ其の如く国々の南京の人六人五
人寄りて互に和の唱小一般よ二人ってのせ寄ってぐ
拙酒なんけなのうよ及んで南京も日本人交易をするほな
ど互に言に計画さんとゝ出ゝ寄りて互に呼よ
寄るを寄り日本の方板よの筋書て寄れと云久ゝそて日
本の板をきゝ寄れいと互ゝそくきるをめゝてメリケン
の船へ引うつる南京人も日本と交易す
る事なれハ此をそてゝ互ゝ南京人を出ゝ
寄るを寄ゝ坊をにゝ方板もちとなるをキロシヤの人とゝ
ゝ寄ゝ風俗かうる寄ると南京人も日本人交易寄る
というるハ文及び寄れハ辞をする事と云ひ是までで
きゝ邪推をゝ寄ゝ事ありを吐ゝ外のせ何とでゝそ

夫帰を寄ゝよそてのくとりよを皆ゝ寄ゝ
ゐをえ寄るが南京人よ向ひて今のは何をいひ寄る
ことゝと南京人もちゝめと言るさそくゝ両六人の南京
人ともゝゝよ言よ聞ゝ寄ゝ挨拶するをペゲツを言よむひな
ゝていうなる事をいつよゝ同ゝ寄れと何るふさゝに
分らの寄ゝ其うゝを言ふ筋ゝハ文字の寄するまなれバ
筆談よすゝゝといふ言海まて筆と根とを言
う第ゝ出ゝ寄ると言ふゝ山筆談そもそゝび
ハ日本乃人そてハなゝ偽をいひそうなどゝ云ひゝ教
さわやをも海ゝ寄の事もちんなと云ひそていゝ寄ゝ
心ゆたひゝ寄を先ゝに方行ふ物をきてうんをんと云
ゝゝさふゝとそてうんせれとも互せび又第うんと云

名を「バラノコ」といふ。味代なきものなり。

枝の上より、バラノコ出逢人を去らんとして、枝を
ゆく〳〵張ゆゑいとゞ〳〵いやめしくなりて、
一面に枝にて張きるゆゑ、降おいなべくきやうに
なり、いん方なし。曲者の私服の下に、刀を
帯真の外ゟ〳〵出しそれを
くも上てまれいよの中へ大きなる毒をいくらも持出し
長くつき〳〵並べきりて、廃にかゝる主右も庵なる
うもたらかくして次第に池を出ゆ大〳〵敷の肉なり
居〳〵くく〳〵庭教をいたすべく

てゆきとらへいさくうも為〳〵事そこなく心安く来
ゆゑて連行を私心なく〳〵いろ〳〵てのほを私ハ又門内
ゟそこも又面倒よりカザクの俗くあるさ毎さわせんのごく
私のほをば示り有さつも同〳〵俗くそ十八九人並ひ居
あり、ハ門を入〳〵向ひの方く私ハ大きなる毒有と云し
た有よあるそこに無だろうの何そもこも敷之定ぐ私
甲ばなだ〳〵有様もこも同〳〵入まてもいとくく私不
ようそこそう大きなる枝をのぼり私くはまのりに
ゑいどつゝて張きる窓ゆりて走りゆりを有る斗也
えるゆるをりくるハよく去〳〵するなるゑ〳〵かくて枝の
ほる事れ二町だろうもも有ゆゑ〳〵不〳〵よ庵くて体
よ不自上ゝをせハいとゑきち座庵ゝり

二人三人して並びそろ〳〵と出でくる小供ら
しと向ひの乞食ども起出又こゝかしこより
そこらに居る乞食ども集りて一人ならず二人
なり三人なり四人なり五人なり六人なり
段〳〵に増さりて百人ばかりの小供乞食
ども一度に騒ぎ出し又次第に増さりて
終には数知れず

如一度に騒ぎ出して笑物を引取又次第に増さり終
酒をのみてハバラノフを主客ハバラノフ俄法者
しばし有りて鹿児にかゝりハバラノフを
おろせと云ふ鹿児よりハバラノフを
出せと云ふ〳〵しかども鹿児よりハバラノフを
出すことを肯ぜず鹿児より人を出して
うなる婦人鹿児を無理に力ずくにハバラノフ甚だ何事か
いゝくれやうと甚だ人集りて主客ともに
有と物云ふをやめて主客ともに後主客が
(ホ)鄭を出すまでおさへ口をなめ〳〵物云ふ事次

ふ者ある女まりて同一さ毎乃事をし六人乃女常
同し事をしてもとの鹿児よりかゝれバ
ハバラノフハ甚く入こりて氷砂糖甚だ
女六人海まり氷砂糖甚だ多く入こりて
居てそれ笑ふ主客ともいふある妖ふ
也〳〵とまく〳〵いふ〳〵悪ふ有ふ徒者の
そして酒ともに主客ともに甚だ
主客乃内にて申の刻半の半く病よ入夫の
ふ初間〳〵帰りてヲロシヤの私設二人と主客ともに
ふ主客を初メの表乃座敷へつれ〳〵鹿児にうら
主客をつれ〳〵の婦人ともに
主客よりて初候炮合羽よ贅歟の

〳〵毎〳〵毎日かくて幾例〳〵三人て乗る例
〳〵バラノフヤヨロシヤ乃船は二人と梢おもり(イス)乃船
十四人乗そうもの男の年十四人持をよう漕
ぞ〳〵躍ありて一回よおどりをそうして手合
に乃手するを珍しき事なれと手合てイギリスの船
廻りて力になる人なそわれ乃何事も心なく〳〵ばうも入ったた
め乗るのみなれ乃両日しともなく乃呉何事もなく
事ふうと心をつけ免乗る斗なるをかくてもおどりもそ
〳〵漕よ乃常〳〵ありしり毎日夜半より夜食と名一
つ出ありそれを多く食べ終れ乃其意乃上く酒乃あ
をお出〳〵それよいつまても日和乃悪く呉を手合に乃其
乃〳〵ぞ

あ〳〵麦
鉄炮
廿五貫目乃分銅
吸物椀 蓋附
草乃さげ袋入 銀のきせる入
小田原地灯 細かくぐる〳〵乃紋と茶渡ふ附もり
片かな乃イロハ 年ぐなる乃いろは云もる物
和漢年代記
鉄炮指南乃書物 はじめ乃あ〳〵を乃終りとうの名にても乃ろと改めるれともうとへなし
右あと二冊出し一毎り年号日和乃何をキロシヤ文字そ
委敷ちもるとあんとそれを乃〳〵日和乃初とイギリス

三四升ぐらも
一挺
一
二人前

同船の人々八階に死し居れる事又もおそろしき海上を漸くにして帰国せんよりも小さき三人先乃如き日出ても及ばざりし程乃義人なもハうを容赦してバラノフ乃いのちを助けて呉ぬるを感謝し一生を終るまで忘れざるなど連ひ帰りてさゝやかに一夫一婦の楽を明暮する例乃ごとく今日もバラノフ乃来りて物語りをなすに其人乃いのちを救はんと云ふなりて連ひの人乃為を待ち居るをのそなどめ帰るゞ又そのにさをなさら今までペゲツフ乃妻をうけ入ず妻をうけ入ず今事乃ようをもいひ聞せバラノフの方へ行んハよろこびてゝびけるといひ聞せてのそとそ行んと心ぜんペゲツに向ひそなたハ日本へつれ参りとひのふを傷んとするを又ゑりてそ我をば計れにそるをしとひそれをペゲツ大よいうとそのよう事をつまびらかに物語りと乱しきく夜べ嫁中までバラノフ乃いのちし事をつまびらかに物語りと乱しきく夜べ嫁中までペゲツ乃いのちを助けてくれハペゲツ乃為めになる事をいふとのうなバラノフ乃いひ事を聞入ず我が方へ行んとするを嫁中ハラノフ

きつまりて其後ち何ぞいそぎの事

出来る逼面の中ふうのインジンの人何ら交易なきあるよこのアミシヴカの向もよき海辺のとそこる何ぐれもちぐれなる事にてそれをアミシヴカのその女をこ人よりふたりまでをいそぎ其後アミシヴカのまちを待ちぐれ程よき舟四艘よ人人斗づゝにて舟よりふなぐりより

類をアミこつかよて百〳〵船く狭入多を獵師ども獵(うつ)
虎乃皮なとゝ持備さはをつまとを

廣東南京乃方へ行へき船を重吉が為め小堀夫乃方を奈呂〳〵朱
うんいう半乃号をもらひうん をそもそもペケつが為ごとの事を知る包

アミこつかよ九四十日斗居〳〵船を出しまとをそこより
午未乃方をさして四十八日をへて四十九日めふヨロシヤ乃領
亞細亞(アジヤ)乃うちへカムサスカ加模西蕃杜加(カムシカツムカ)の島〳〵有たゞ
江る九四ヶ所十里
なるを〳〵 あらうを船夫を二十三箱つゝきありヨロシヤよ
てそれ迄乃ると〳〵りいと云日本そて八〳〵奥エゾ常盤の
なといふのし山二十三箱乃うち三箱ハエゾへをして日本乃
海く二箱ふふ人住ムヨロシヤ 住乃女一箱乃うち四百八人住
江る其郎そ人の住ぬ海く乃向九五里十里斗も

をくとなれあるそ二十里もいつも迄乃ると多をぬけ
てヲホーツカ〳〵行なるを雪深くして海上ふくとうしたな
く雪時ハ風乃しくなくてもあれハ風あり
て見合せあれとも風ハそやかを時ハ風あり
てつつとも船を出しそくへペケツンあるを知
数をある海よ海あり有ハ行くも先くも出ぬ
少く三百ヲ斗出ハバカムサスカ加模西蕃杜加(カムシカツムカ)のそこく
泊て安合せ日本へ通路乃ハよし若なくともヨホー
ツカまて陸路を行へき元とそいつまとも元ゟ
都ころハ又そこを船出して北乃方へ三百里行てみな
と乃入口へ出ころハ石火矢一乃放ちて船をとゝめる

船乃中〳〵も日本人三人乗ると云ふを聞てなつかしく思ひ
ますゝ船乃中なる三人もこゝまで日本人三人乗ると
いふを聞ておの〳〵逢度思ひ乍ら浦〳〵浜より
浜辺〳〵て此舎利乃ごとくに五六
の人〳〵とそ見るれハ古ぎれ人なつかしく心地して
つま〳〵なろう〳〵見くて打泣たり
ハ船乃ごとくハつくの人なりと思ひ抱きつき
乃もなるゝ吹流されて此島乃浜乃ごとく物すごう
人の吹流されもるやうと云ふ
といふまゝ其事ハ角次郎乃ごとく
流球まで十七年乃間ハ
て江戸〳〵まるとて龍風乃ごとく
水船のごとくなりて六ヶ月斗を
を云ふ事乃ごとくして三人死
物こゝも同しごとくいふまゝ
のごとくそこ〳〵ハしく
いふて同し日数そも薩乃人の氣
もそれより海乃上
つゝもるに船乃ごとくして
もる程乃両風
もみなしめうとして
ハもくて死しもと三人生
〳〵本乃苦海なるを
ふかくて八命も續くまゝ

二人つれて酒を先くやり候て二里斗も行て
ちと用ありて俵をきる人よび迎ありと聞
せきれバまたこと白ふそへてやりぬ心得る様よ
そこなる人へ書れとつかさ書ハ酒ハ
帰りなんとて完乃中よ仕舞候て喜酒人吉乃カムサスカへ住
倉箱と酒ちやかん乃内ヨロシヤの頃するあるそ
「ウシ子コタンといふ酒也そこ乃完の中にて一夜を明し
酒一ぱいある病人も又の日酒ぱいまりてそこふて斗居
帰るいくる年のなりて喜酒人吉乃カムサスカへ住
帰をこてひ日半へ送てそれしる奥エゾの工ドロつ酒を
取和をめれど風行しくくして引返し又吉人ハもどり
帰りあるにならんとかてる主奇も我身のうへ乃あし
とかてる安せられハ和そ
人なるまハちてそれハ親兄弟も同し一日半乃
ちちひいへとも和ハ一ぱいと一ぱいとそ
て二人一和よ一ぱをかし酒して同居せしめ帰をかくて
十日斗をへてイギリスの船ペケツ書状べ子つ外よ
思ふ吉人船合二人船りてこれ船そ工ベツエデメツなと仮船
ひよなりてち乃湊を出帆しぬ多くいるなる事よろひ
形あるる又十日斗をへそ薩チ乃船表これ情がいよ
ちそ物くこ人ハ六合ひりちに出そうり乃出帆酒也酒
ちにせこあちこ人ハイギリス乃船也とつをう
ていぬるしくこひ和そなくハヨロシヤへ行をう歌し
あるやと問ていなまる事ハ和しとつ行ちハ和も

人也そもく多ちそ海と
ゐてそさつくの事を多。人なれハそのまをカムサスカの汝
人より一事も教く個ゐ多る上なるていハ事ゑ送り帰ゐた
ともなく〳〵由郎く何んまそ早龍郷てそも九ヶ月かれ
なるを

さてもく郎〳〵トロフまて日本乃里数まて元四千里斗ゐるとぞ
はカムサスカよりヲホーツカを二ヶ月ヲホーツカより江クーツカを又二ヶ日かゝるよし郎を又二ヶ日かゝるよし郎を今そ
たのユクーツカよりてカヒタンの郎を毒そして日本通詞よりて来ると
ゐ今の郎〳〵イニヲロキセイキセロクとそいふなる

それハ誰来るそ十九ヶ月を経されハ郎の差帰もなれされ
ともとへケつよかるまをそなるよへケつ乃いふまをけてハ来
夏氷解そきつ毎人そ日本へ帰るを我つまも来るまれ
三人ともふ海らハいつ斗郎そかなくも旦てなれ

ぬそ国よ長井せハ病を生そんるもはかなきかゝくく
ふ夜まそ毎也計二ハ郎くもそ国ゑてそ毎也六人一回よ海し
それまれ夕カウ小船をするやうひしよいふるも来夏二ハ
ハへケつらそ国をするやうひしよいふるも来夏二ハ
彼会物近も我海らなゐんとゐさそても薩ヶ人ハこそり
送を約て日本へ引渡すなるを尾張乃三人そそなく送
約て引渡すまをゐるハいふとゑハそれも得そり
とうひしそれとまそハ吏員乃うくさよなふおくそる
なれハそれをまそへケつハこふやでゐるを郎を仮郎訳
まそ廃来のそくへ毎也そとるなんとそそふふて主吾を
ゑゑ乃外よ初てへケつがをうひをまてるどうきふと
さうよ入るかこそづくなるをかくまそへケつ

三ヶ月のるなどしてハ船のよいびとれなどよ悪しくて小アメ
りカスこころもとなき事どもを無どもする船を洞りて漲つた
此ごろハ雪三丈ばかりつもりて人斗もつりる丸ゐつくまも家ハ
そ煙出し〳〵より烟ハ立ちとゞこほりて行ても
ゆくへなどもしらず家の入口ハ雪を切つまりてがん
ぎと名ある処のみ家ゝ丸ゐ悪しくて大きなる村ハ
ゝ仏をなし〳〵不〳〵に忘をいけてその内どハきやうんよ
て漲ある処のみ雪積も同じ〳〵く村ハを組なし〳〵甚だ〳〵砂
をこゑ人斗も並ある処のみくまれなる小家なども板よ
てふきあるも又ハ雪ばかりにて板なき
産婦の入口ハ甚だ板にて観音寺きの内ゝして上下〳〵
座敷の切しを漲ある処なり甚だ〳〵ふ又二ヶ入口ハ方り

て甚だ〳〵ふ雪を分てゆくなり一ヶ
ぼるやう〳〵たる処ハ雪ハ甚だ〳〵ふ雪ハ
やうなるものを仏ともをくの
くのごとくなるものを雪ハ甚だ〳〵ふ雪ハ甚だ〳〵ふ
〳〵ふ出し〳〵そして雪入口ハ甚だ〳〵ふ雪ハ甚だ〳〵ふ
穴をあけ口をふさぎてだんだんと
穴義を出しやうなる仏ゝ丸ゐいくつとなく穴ふさ
家乃うちにてそこを義をそこくしやうなる出しやうなる
ものもやう〳〵物音を聞〳〵しやうなる穴乃あくつも
ありて忘〳〵くなる処ハ毎朝出〳〵斧にて雪を切をふ
く道をいつくとも家〳〵の雪積乃上を歩りてゆく
なり

何ヲもそ〳〵もたもの〳〵もせしおもいをねぶるといひた
とえとう後とうとき者なと多くそ〳〵てもひる約時る
ハモヤ。トン。イレバ。いクセン。ソーニ。ダバユ。ランナ。とい〳〵ハ先
乃人へランナ〳〵ヲジメと云ひ〳〵者を付てる時こなく
ようこヲコンノダイウグダイ。ホロッシヤユ〳〵といひ〳〵
特帰もそ〳〵とぜ
人のもの〳〵約「テウヨロホタイなどいへハ「ヲルバカ
てセイなど云ふ「ニテウと云ふハ何もせぬといふる
く又こ「ヲルハカてモイなといふ「モイとハ法ふるを云湯
ホ人に約などいふを「バニヤモイとそく「スカゼハ雲と
ふるなるを昔そなる時を「スカ〳〵スカゼとそく
あしそ常俗乃句ふ「ナアといふるを付そいてるる多し

和を「スーナとそを「ナアスーナといふ類く
如乃名もいつまも「ヒヨードロイハノブナと云ふる文字を付る類く「クラヒヨードロ
ハ我ホ乃如人の名よお又
イワノブナ又を「アフトッチラヒヨードロイハノブナなる
類く常よハ兵へクラ又ハアブトッチラなとのこふく
数ハヨチニ「ヅワー「ラレー「チユテ「ピヤーナ「セーシ「センニ三四五六七
キーセン「テヒテ「テセワ「テセヤ「デーセヂヤ「デヤデーセヂヤ
笑ふるを「ヒヨードロイハノブナと云ふる文字を付る類く
日本そいつ〳〵とい〳〵ハいつ〳〵とりもかそるるし
こし年和英語集
〳〵出てる乃そ〳〵寄つ〳〵汤のこと多くそハ
わ〳〵甚時乃ま多をまとり返報乃を

大和と見得るものなく我朝ふなどいふ名
蝦夷よなどいふ名ぐさもなくて
ただ村と国郡よなれあるのみなれと
ゆゑ〳〵しくそれと日本とそいふべもなくて
形勢などいふ名ぐさもなくて神のまゆく
なるにこそとそを文字もなく
年齢は皇国のやうにそこの大御よは生れても一巣
よなるなとていふものはなくてただ
なるく

日本は小さき洲なるをとしてなくてただ
ニツモンツケ蝦夷伊賀など書て一巣
ワロタサブカシフカセれセエスなとひてまのあたり
なるく

(日本 衣服 含 カブリもの 大二 蝦夷)

国人は絶生日をかそくてそれ三巣の十一日書る
なといふものを月日といふものをなくて年ごとの
とさ〳〵よそれ一月のみをものもなくて又三月とそ
ルダカウのやうな日本号のいとめでたきものとする
を笑てオニテレイハンよりてそ見るふいと
大きなる法螺そそのにうよりなるを目
とるし〳〵ものと薩摩のかたよりなるしが
甚国乃人のまる形てそれとそいふものはなきをしかし
こそいとめでたくもとそ
見〳〵ものとそ書きるものとそ
海西の水〳〵欲のまよ穴をうがちいでし

おもしろく氷のよく出る折ふしにて甚寒し氷
をくりて多年〳〵病る叟此氷の上を
そひとる者を人〳〵迎とし歩数すをま
古も見よ初冬よりて行ときとう
こし一年江づ〳〵きまりて乱妨をし多時酒樽をう
そも百〳〵持帰をふ酒ありて出さうれハ持を
くり死て酒を出しうれど持の形ハ石のごく成りてハ
斧をもて酒をおろして目くるようにて要こうとう
三月の望丹ちるの名もそもいろんとそうるよう
て皆〳〵二三日前うち肉などハ食ひて持を出して御
寺の前へ里中の人〳〵つまも出〳〵形ち有〳〵代官出さ
多きうち海〳〵の人〳〵これ口をなそうとて酒なくおろ

皆〳〵約束のごとの人〳〵乃口を多ひよなめる地 書告
もろよ出〳〵よ誰とも名をなく寺前にて八口をなそる地
ふけ帰る三月半八多へ出ざるき

かく口をなめるひよいさうをもろ隣なくおろは
多〳〵しい山誓ひなれハ一下さこの人〳〵当に一人もくよ名そて有
このそなくしいそて下さそごとろく〳〵そうさそる
アミニウカ〳〵二人のかう路頭をそてるも隣をなし〳〵と又名
ろをそる如へし

初四月よなりて又多りうをこてひハ七月半多うり
粽を沖て甚日を寺〳〵大なる半種と小さき半
詰とを許日打〳〵ある山も多て多り入口も多
同半入口よなりうあるを山も多て多り入口も多
く水うそうる先多ある方ハ山乃麓うりとも
乃入口をそこごとうひ多〳〵よなく長き板橋

例乃家と雖も称よく手をかけて掃をそれバ
きたなくうら手をそうじ出す時ポフ又其ほのよく
なり乃ち手をのせる時其手をなめてそうとなり
神佛のせうなるものをポフとつひそれを仕て出家
のせうなるそのをポフとうひ嶺(うら)気(こ)をポフとうひ日
しもちる句〳〵其のほいあくたうひあるうものを
いやくされハ此国乃風俗あうの宝礼の句多をすくくうくうとしとう
あうの宝礼句を字音う書分ある一冊をうをそうよ
天地山川人倫生物京会名残言語まて〳〵つもくる
こうそてうまく〳〵もあ集めあるうのなりそれハ家〳〵重
ましとうそうるふ一体この宝とうの宝とを句のきひ
きあいとくかうりて一字を二字あるかくざれハ書取う

きゞをし〳〵もうてもそ物言のハり句乃切あもうく
その書分あうをよくうそうるとを吉ゞいをも
しく安あるやハいあくたゞくうされハうつし取
まうせんとうひくあ取

船長日記下之巻

ひつる年乃文化十三年子五月ま[illegible]つらくまなう[illegible]
くお解ふなうをくれハ六人の日本人を本国へ送りつ
けんとて来[illegible]ヲワーヱール船の名とて[illegible]凡二千
石積斗りの二本檣の[illegible]舟一艘外ゟ檣舟一艘長
さ二丈ゟうゟ幅四六人斗[illegible]海き二丈ゟうして大きなる
丸木乃中をほりうつろ[illegible]ゟうく[illegible]ゟ乗る[illegible]魯西亜乃
船[illegible]スレズニ猜厄利亜(イキリス)[illegible]船[illegible]ペケ(モノカキ)筆ゟ[illegible]水
ゟ二人ゟ[illegible]薩摩ゟ尾張の六人[illegible]外ゟ船乃ゟ男女都合六
十八人ゟ[illegible]ゟ時薩摩の船[illegible]ゟ尾張の[illegible]
五[illegible]二人大病なりつれハ能乃皮ゟ毎ゟく船ゟ[illegible]

つゝせよの月廿八日比カムサツカ乃ガワンのくにより船を出し
午未の方をさしてそこる程よそ六月末々小尾張の水そ
無海乃末之湯 船中よりこと先真
よりとへゲツよ告くれハかくみそ日半そいハまし
うゝみそと同くる九我国そハ真こそ乃湊へ入ゝ陸
上り薬ゝゝを尋くそれハはるゝそも死そうり
湊をなくいつゝせんといひひろまゞ後ゝハヰロシヤそ
いつよそうゝひのゝ我ゝ
薬よすゝとゝゝバヰロシヤ乃さゝりくゝ
はうゝひてゆうなんとおまるせあれハ看ゝ船よ
乃石を夜出ー半之湯がゝ死骸よくゝつゆ物のゆ
なるゝのよのせ至経又とおほし支ゝとるくゝ真

物うり海の色くそとゝ
て半吉ハいゆもさゝ
今ゝーみるそ本国へも
ばいろそ乃残善しいゝ
かくて工ドロフクナシり八
ズニよ向ひよ工ドロフ海
なとはしそくれと日ゝ
て見くろ地方ゝも
ゆてやりよ春晴ゝ
地方ゝくまろもろよ工ドモといゝ湊もありて船のへハ
船をしとゝゆ向ひをゝ船二艘ゝくさり
そ艘をるをくゝくゝ

先〳〵舎りをしてそれ
人乃長もなく お祭乃御神輿
沿道そもつまいにちく
て おとゝの あをゑひ
〳〵をゑひ 舟乃めぐろふ
乃〳〵くるとよう也 おやま
湾(ワン)にる而して 天気を見合せ 居(アキヤ)
四郎もなりて 人も 伯(イ)
て なるべく 二十ウといふ
人斗小舟う無事をこてる
へう出ずくり 七月七日
出てそ 雲八 海のうえ

舟を出し 秋の 波の 外斗 よ又ドロフ乃 小東乃 そく
そくう 先〳〵そこそこ 日本乃 海なれ 今八 人安〳〵と
階〳〵かゝをる〳〵 波ひ 静〳〵 ゑ 波 ひ
斗ず〳〵 破浪 二三十丁斗 も 当布よ もり 又舟を 陸〳〵 持
ひうりてさゝせんのやうに 御乃 ふて 我乃 ふみ
又も 能乃出うたをたゝ 我 ゑ
うく 牛乃大きさ斗なる 大熊(ヒグマ) 悪(ヒグマ)とやらん
ありいふ〳〵 おそろしく 舟乃下〳〵 ふみ入ゑ
出て 能う舟を引 祝さん ともやがり〳〵と 音する 名
物乃 漁猟を 初ゑなく 打 祝ふ 東
ふて舟を出〳〵 又なれ 我 ふ
つゝ〳〵 祝ふ入バ 舟乃 めぐ

一宿四ツ半ニて山ヲ二里斗ニて一宿ヘツヽミ七百ト云ふ海ヲ船ヲ出シ一夕子モイとふ所ヲ至リ書ヲヤとる十日ヲそこふり（そこよりエトロフ海のきしをつたひくまわりくクナシリへハそこより多クの海上七百里の海ヲのりゆくそうり）浪海七里ヲ渡る船ヲ出シ一アトイヤハ（アトイヤハ岸ヲ云）十ヲそこ乱ハなやといふ所ヲ至リ一宿ヲそこ小休ヲそこより九十里ヲ丑寅のさ乃出海一アトイれど二百十日ゆく舟ヲ出さゞれバ十二ヲそこヲ出て又つゝくゝ海の岸ヲめぐる舟ヲ出ス事ハ十七日ゆくゝ海の岸ヲめぐる海乃岸ヲ泥（イデ）ニ泉ハ湧ル所ヲ至リ一宿ヲそこより十九日ゆくゝ舟ヲ出ス事ハ十九日ゆくゝ舟ヲ出ス事ハ十九日ゆくゝ舟ヲ出ス事ハ

[illegible]丹波[illegible]此寺も支しと見
[illegible]又八七八里も行て寺有
[illegible]ゆくなるへし（此寺名を工ブ北寺の人の
[illegible]もて入あるよし名をきゝとらず）日く馬よ無ければ
[illegible]かもちやゆるゝ〳〵国八月朔日よりアリケシといふ未
[illegible]の寺名よ名をとりそれ
[illegible]そて（アリケヨリ後よりて堀夫人の人
名をきゝ後よりハ日本の人数よ出て居）白乃岩完寺といふ寺
岩完寺如来八身分よ
寺より来りある僧くしそて一日逗留を新し
[illegible]よ死〳〵ある水をとり十二人の法名を名更回向成
[illegible]永代供養をも新ニ
[illegible]そこより三日めて九月二百申刻半よ松の本の入名
[illegible]よきぬる松の第[illegible]細記[illegible]見四人来

[illegible]情夜[illegible]〳〵りて町書面へ法名[illegible]
町といふ石の宇名[illegible]
[illegible]ハ名前よ船人形〳〵中よ
[illegible]〳〵きあるものいとくれしと名前やうく
宇〳〵入らるゝ〳〵いる
てみな〳〵いるくかなし
時半よはもつて[illegible]
[illegible]切支丹宗なるをなり
[illegible]らうと出等なりうけるハ仏をきるよしを笑え上
[illegible]これハ文字〳〵久さまて
[illegible]さあ〳〵乃等[illegible]りて十日半が程よ出れ〳〵そして其
[illegible]口名を[illegible]〳〵のほせられあるをハ法下船者をて[illegible]

に笑え上げりてなかに吉田村へいこゑをうながし
事もなくてよくも留るをしくりと言ひそえる。
のこゑ波や尾張の水
ゆりまをあるをいつ七人の親よりは主人ハ主君主人
笑んと俗をう事ふし
かくりきうせんとうひ向ひの家くめれハ時こそ
おつごひ我のいつ
しなこと主君をやるとかてみ笑ほうる云出さんもい
と泪しくたなひてやし七人の死し
つきくお俗をも出せぐ
時いうしくなきかなしむせくてさる死まで
家主君もとてこゑ
あるうゆりある海書を夫乃ゑ

に笑え上げりてなかに吉田村へいこゑをうながし
事もなくてよくも留るをしくりと言ひそえる。
のこゑ波や尾張の水
ゆりまをあるをいつ七人の親よりは主人ハ主君主人
笑んと俗をう事ふし
かくりきうせんとうひ向ひの家くめれハ時こそ
おつごひ我のいつ
しなこと主君をやるとかてみ笑ほうる云出さんもい
と泪しくたなひてやし七人の死し
つきくお俗をも出せぐ
時いうしくなきかなしむせくてさる死まで
家主君もとてこゑ
あるうゆりある海書を夫乃ゑ

事を為むとてもうんぬうそひそひと入聲を
夜あるんようそ此後まをそうんぬも後のまへ
ひこをれへ〳〵存へ〳〵そうんともいひ出うそへそよへ
となりて乞ようそ親の許を初んこ孫ようとひあへ
ろふとも是も亦さハいひ出〳〵うへかへ〳〵又まを吾ハ
我ら故そこうほんとそ存る寸ぞそひをしてちう奥
乃句合こそなうの事ひつまされハ無〳〵なる命をも
捨のひ〳〵せその時うそいう斗うい〳〵れめをうんぬひ
うんそれよなどやまに喜八の孫をそふる為ふんの時
まにあへ〳〵ねうそして後の世よ先そうを遠ん時いう
なる類をうむひ竹うんよ〳〵や人のつよう〳〵乞舎し
てごふけうをそぶてうけて親よんへよへくなうへ人

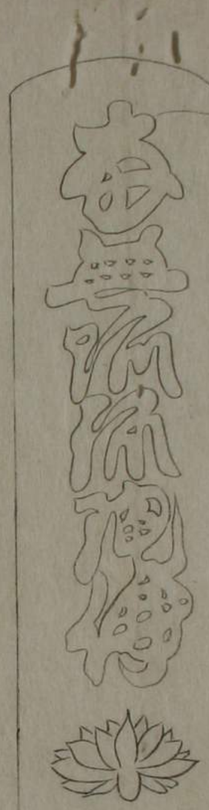
のうとそふんこうほいのるなれとうつま親新
もうなごちうひすめんうまを吾ハ親新
ありと四めの乃八九月ハうれとも女乃ようそ
が晃もあ〳〵ハうれとも女乃ようそ
もなへて親子其の日をぶよふ〳〵ねるさ為をふたに
吉のびすい〳〵海〳〵又も入聲のるをさは
〳〵ふひすめうれハうれて家よりうめへよ入聲
のるをすめのうなんうり今ハ家をも捨竹へしと
て十月よなりて親新のうちよふさ紀竹きゆるの
有うるをせうよそて備うん親よ家を捨てそこ
へ行て弥陀をしひ吾ハ我ら存るがうの十二月よを
吉うみ竹り為をふれ為をふて皆人へん

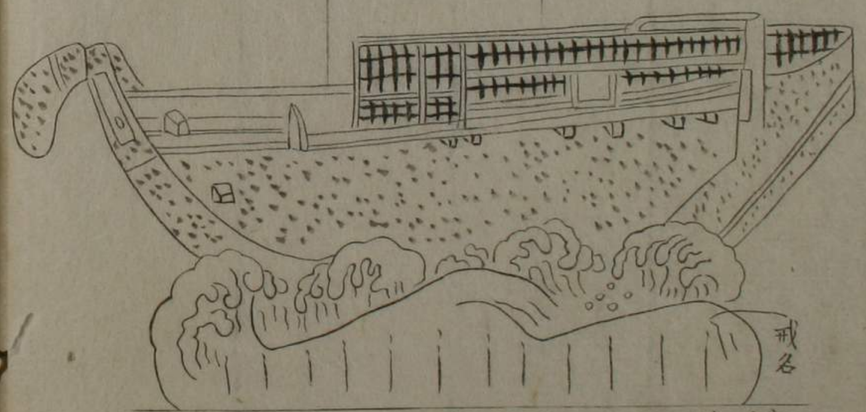
尾州

笠寺観音境内へ建

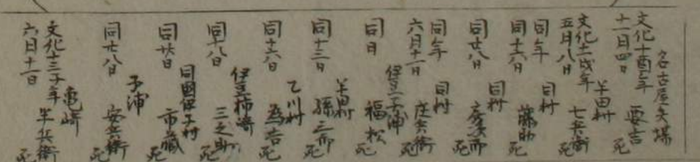
石碑し字

徳本筆





戒名





トド牙



海獣
チカイ タベ牙



ヲキナノ歯



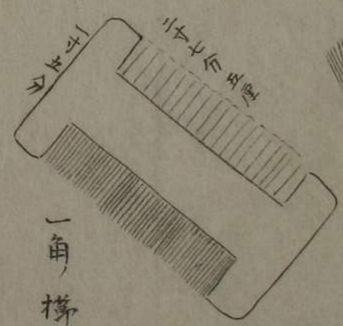
ヒヤまこ
鯨ノ牙


杓子形
真鍮
錫
茶ノ中一牛酪ヲ
二分ヲリサシテ
叔甘蔗ヲ入テ
クキタツルニ用ル
ヒシ
南蠻鉄
同上


ロスク
ヒシ
剃刀
黒
ノゼンキ
三寸七分
平ラ
此蓋ニ筆ヲハリ置硯石ノカハリニ用
インデインキヤウニ見立ル筆ノ
六寸二分
底ニモ皮ヲハリテ
両方用ルナリ


剃刀
三寸五分


鏡
四寸二分五厘


一寸二分
一寸二分
一角ノ櫛


髭モミ
一寸二分
惣長三寸五分
角
此毛ヘ水ヲ浴ヒノ害ノ中ニアル白キカタマリ丸物ヲツナグカキマハセバ白キ泡立ソレヲ付テ髭ヲモムナリ牛酪ノ臭気ノスルモノ


一寸二分
南蠻鉄
害物中有カタマリ

所ニ刻印アリ

木匕
四本
箸ノカタチ

外ニ本ニモ
(二)ノ如ク刻印
(土)アリ

砂糖ノ入
(サボヘ)

南蠻鉄

チャスカ
是ハ茶ノ折レタルヲ

茶碗し漆付

茶入 南蠻鉄

此穴ヨリ
チヤヲ入テ
茶ヲツマミ
出スヘシ蓋ニ有リケルヲ失ヒタリトゾ

ペケツニ悪マレタル石

南蠻鉄ノ
出ル所ノ石ニ
色黒
斧ノキノ如
光彩アリ

ノゼキ 小刀ニ

合薬入 革ニテ製タルヲ

唐角
五分

角ルイシ

三寸五分

カムサツカノ石ニ

火口明

鼠石英

(鉄ニ非ス)

ハンカ庖丁

九寸三分

五寸六分

七寸七分



三寸

未カ字



南蛮鉄ノ如ク
ヨバ響音磬ノ如ク
餘音アリ

五寸

針ヲスノ穴

一尺五寸六分

藤ニテアミ
ダル籠ナリ
丼鉢ノカワリ
ニ用ル水
モラス

下ノ方

革ノ手袋

長七寸一分

損シテハナシ 各如ク

裏ニモアリ

襟巻

方九二尺七寸五分

白キモメンニ

糸細キ

絹ノ如シ

キタイカノ産ナルヨシ



アツシ笠

藤ノ如クニテ

アミタルモノナリ

黒ラシヤ

笠



冬春雪ニテ白キ

紙ノミ見ル故

眼アシノナルニ

依テ目通り

赤キラシヤヲ

張ル



雨天ニハアツシノ

笠ノ上ヘ更テ

覆フ

サブカ 頭巾ニ

黒羅紋

綾合ヤノ

如ク緋ラシヤ

ヲハサミテ

筋トナシ

タルモノ



キキナノ鉢袋ノ

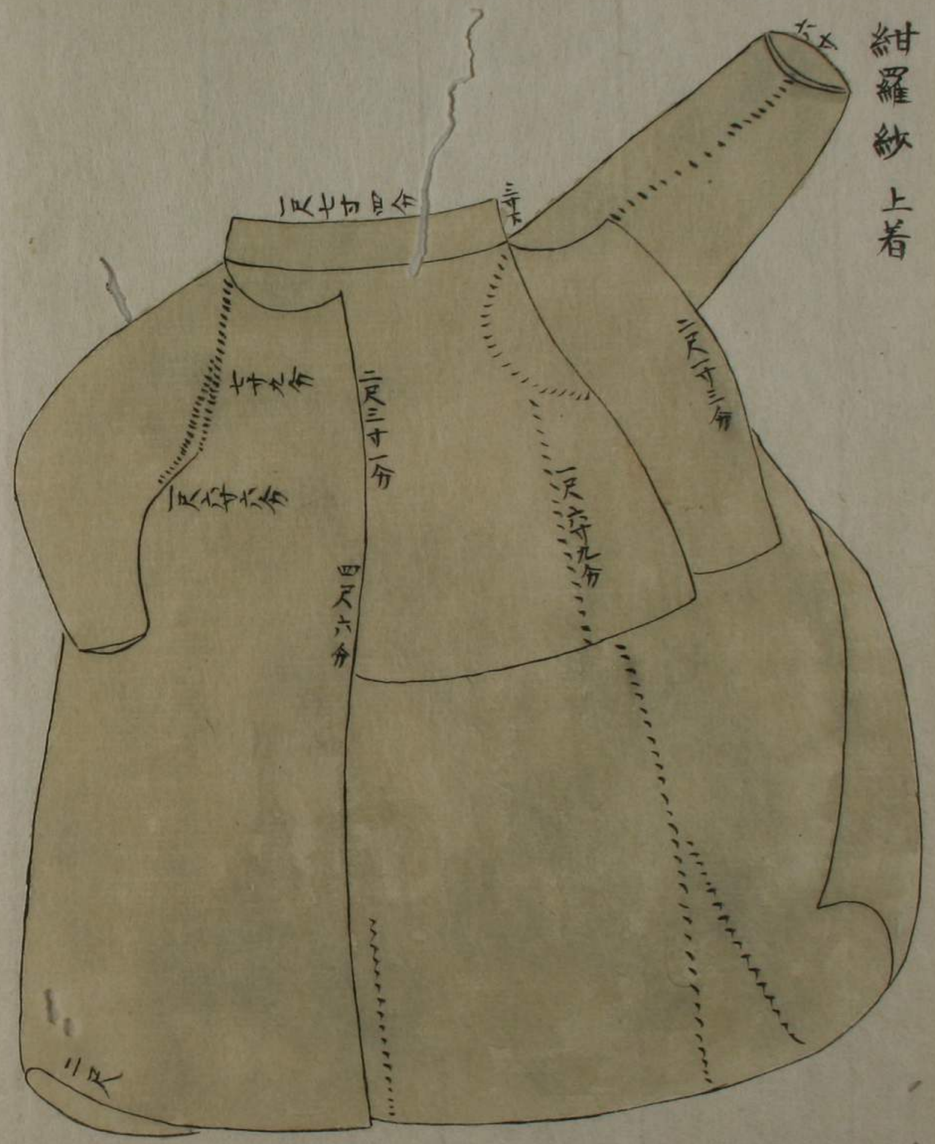
皮ニテ作ル縫メヘ

黒緋ラシヤノ

キレヲカガリニ

附ル

紺羅紋 上着



同背面ノ図

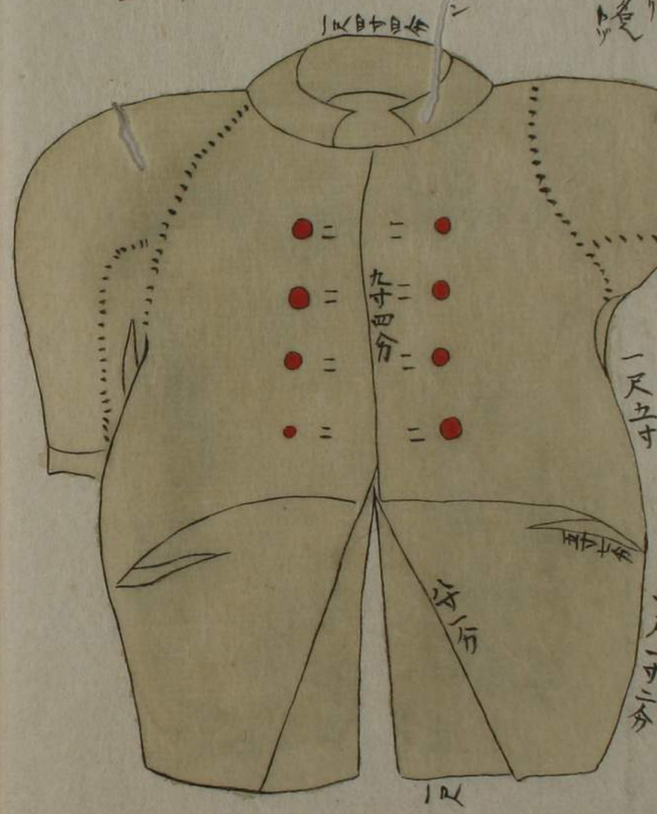


紺羅紗
上着

牡丹ノウラニ如此
圖ニ文字アリ其人ノ名ト
ゾ

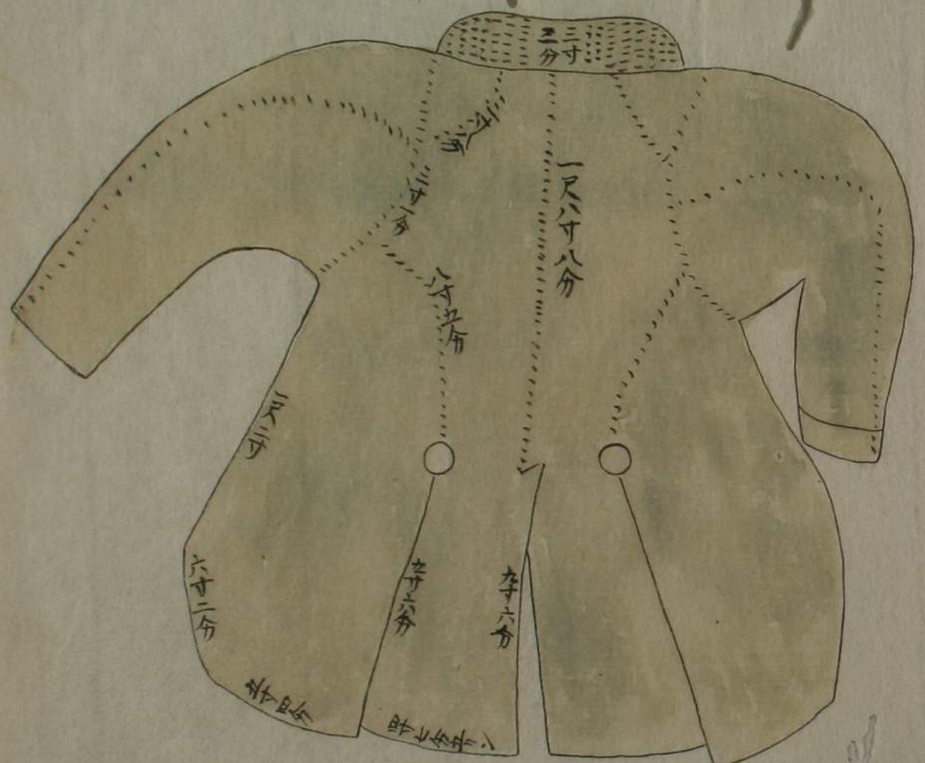
サニワタシ六分カケル

如此ウシロノ
長キハ上品ノ
服ス



此穴ヘ手拭ナド入ル

同背面ノ図



萌黄
モメン
上品ノ服ク





花色羅紋

如此ク口ニ
下リナキハ
水玉ノ服ク

一尺三寸三分

二寸三分



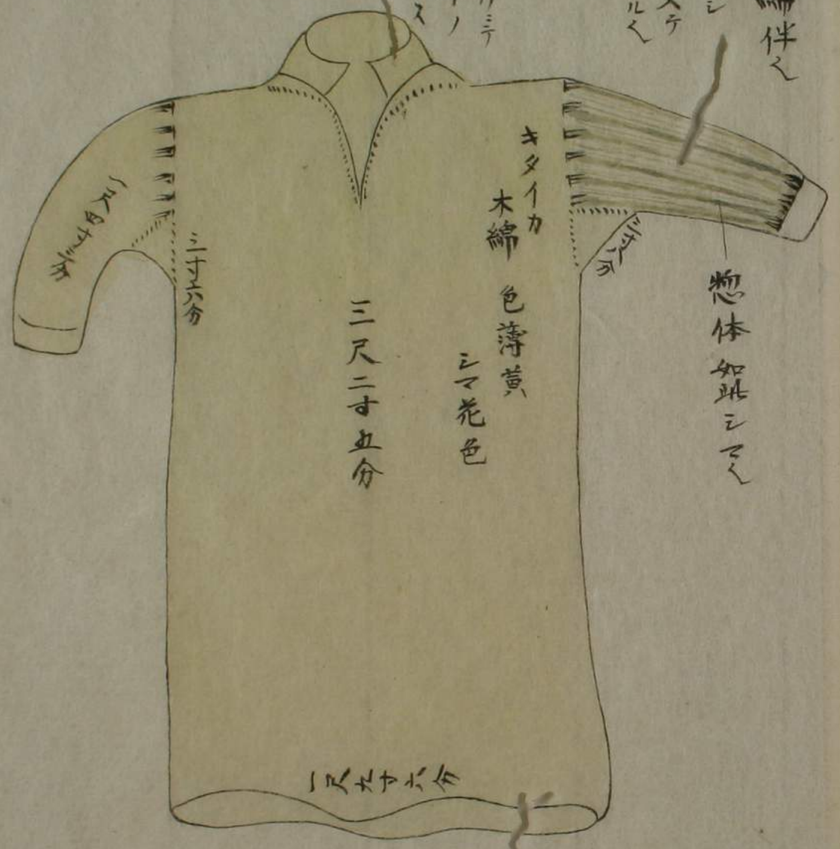
脊ノ方

白モンパ
水主ノ服ク



萌黄絖(ヌメ)一
紺羅紗一

司製
胴着ク



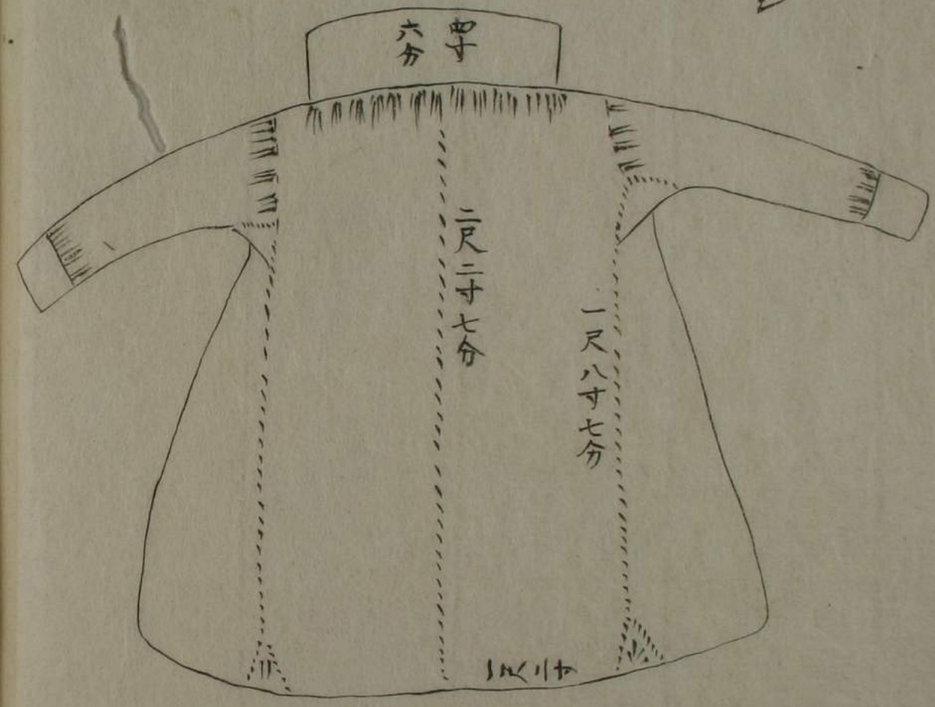
チルバカテ 縞伴ク
一ハや綾メナシ
下ヨリ頭ヲ入テ
キルク

マン別サンタン(本ノマ)
キタイカト云所ニテ
織故別木綿ノ
名トス

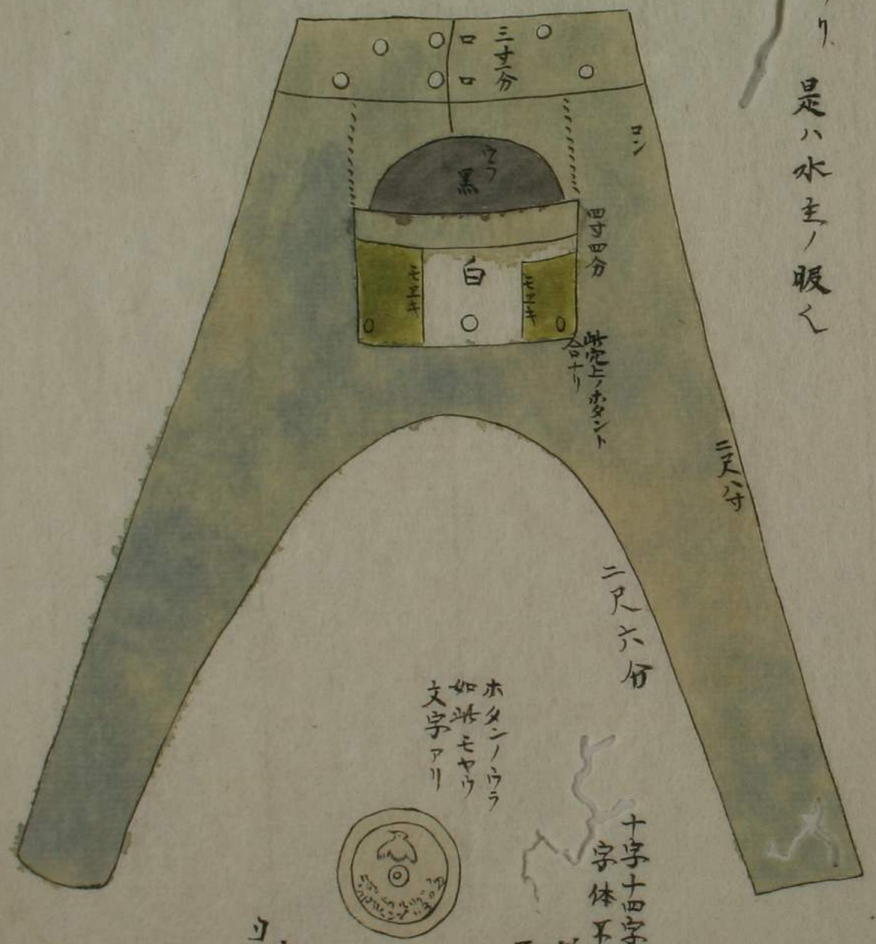
キタイカ
木綿 色薄黄
ニマ花色
三尺二寸五分

惣体如此ニマク

白モメン
ジユバン



羅紗 サラリ 股引ク



十字十四字アリ
字体其詳



白羅紗地合至テヨシ　上品ノ服ニ

此所ハ寒中ニテモ入テアタヽメル処ニ

五寸四分

此穴上ノボタント合

二尺三寸七分

二尺一寸

一尺三寸五分

白木綿

一尺八寸四分

足袋ヲタヽミ置図

先ノ方ヨリキリクチマデノカノ表ヨリ引返シカブセヲル

メリヤス足袋　二尺

白黒ノ糸ニテ織タルヘシ

二尺三寸

同

一尺四寸五分

水獣ノ皮沓

一尺一寸四分　カキ色ニ

一尺一寸八分

水中ヲハク沓ニ

雨天晴用桐油之類ヲ
大葉ノ餅袋ニテ製ス
縫メニ黒緋ラシヤ
キレトモ毛トモ附テ
カザリトス

カハキタル時ハ
即切紙トス
モノハ如シ
穴シニメシニテメシバ
紙入ホドニナル
裾ヨリ頭ヲ入テ
着ル

アザラシノ皮

紐ニウナ皮
長二尺二寸五分

青サントメ革皆

一尺
八寸七ト五リン

山牛ノ皮
色薄黒

雪中ノ蓑ト
惣体
ナレンノ皮ト
是モ下ヨリ
着ル

此毛ハ
熊ノ腹ゴモリノ毛ト
雪ノ顔ヘ
フキカラヌ為ト

皮ノ裏
古渡リノ
紅革ノ
ウラノ如シ



水狗（アサラシ）ノ皮袋
此蓋ヲ覆テ
細ニテ
クヽル

衣服ヲ入ルモノ
蓑籠ノ代リニ
用ル

白兎ノ皮鋪薄圖



ウラアラキ木綿ノ類ニ
花毛氈ノ
ウラニ多リ

六尺七寸

弥帆ノキレ
モメン

舳ノ方ヘメツルノサキ帆ヘ

松陰日記抜

皇大御国の御ありさまなくおさりて先
てあるき事ならしもと上州御代官の書ものこんく多る
を何ぞ八今さらにいそんそをもく新井宿奥永宿なと
もいひおくれ又河関院のお人のかゝるを儀しかりとも
領国稀とて少もまつてそのおりの物さへく
毎年そをいつくまにほ先多くにも行くを移とよく乙
をはけく見えにてそいちもくきくされそを乱世となな
すとても儒者ものゝ井もも物ふくこそ乱まくこそ乱
ふるまそ階同しくそあすそ先ことに二百六十年に
そ乱おれくハ実に浦安乃名ともしかあるへし

文政六年　四月十七日　　吉田　中山義右